

令和 4 年調査の概況

（令和 3 年度決算実績）

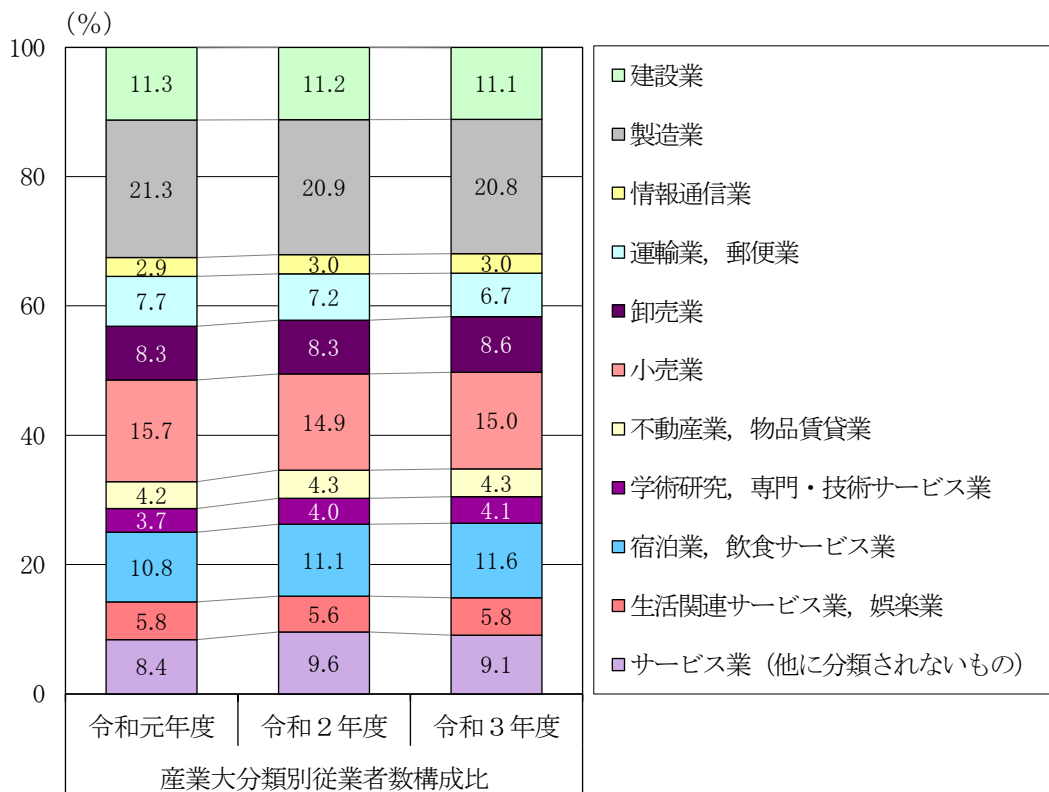
The general condition of the 2022 Basic Survey
(Settlement of Accounts for Fiscal 2021)

本調査の母集団企業数は、3,367,155 企業。この母集団企業数は、事業所母集団データベース（令和 2 年次フレーム）による中小企業数。

第1章 中小企業の従業者数

- ・ 中小企業の従業者数の産業大分類別構成比は、製造業（20.8％）が最も高く、次いで小売業（15.0％）、宿泊業，飲食サービス業（11.6％）の順である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの従業者数は、9.2人（前年度比▲0.8％減）である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの従業者数の変化を産業大分類別にみると、減少しているのは、サービス業（他に分類されないもの）（前年度比▲6.8％減）、運輸業，郵便業（同▲6.5％減）など7産業である。

第1-1図 中小企業の従業者数構成比の推移（産業大分類別）

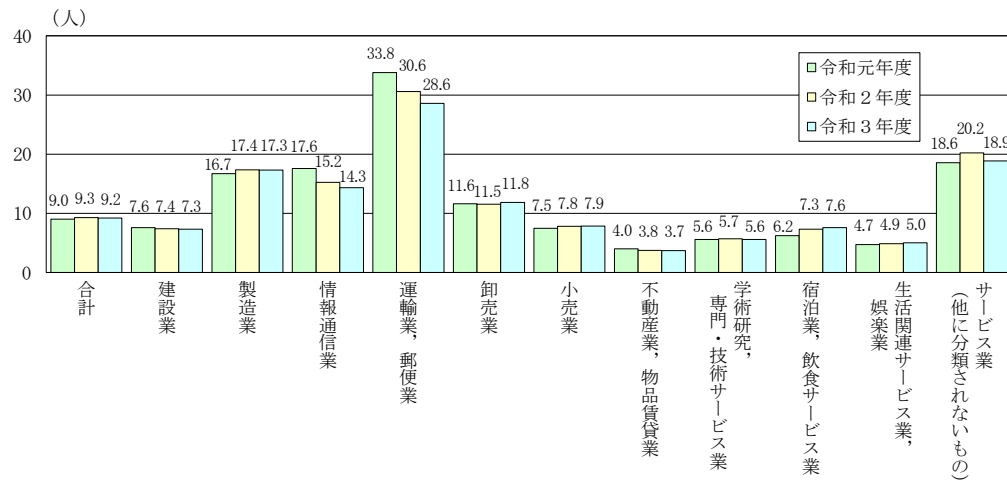


（注1）調査の期間・期日については利用上の注意を参照（以下、同様）。

（注2）四捨五入の影響から内訳の合計が100%にならない場合がある（以下、同様）。

（注3）集計表第1-1表参照。

第 1－2 図 中小企業の 1 企業当たりの従業者数（産業大分類別）

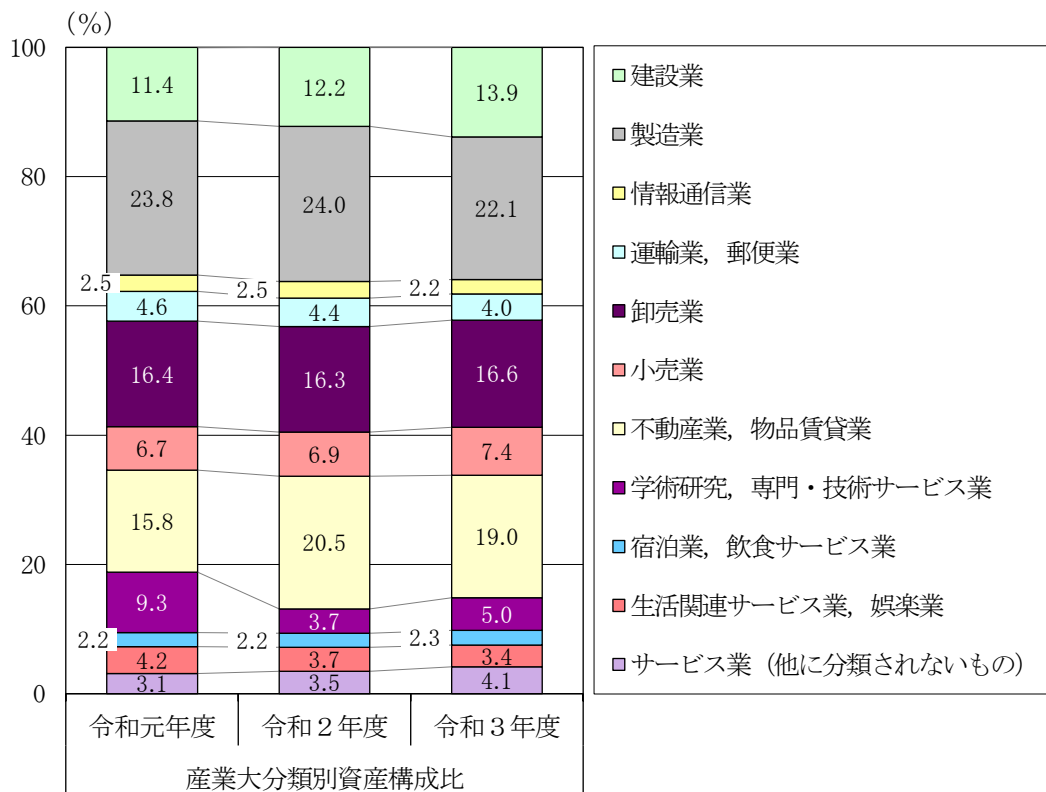


(注) 集計表第 1－2 表参照。

第2章 中小企業（法人企業）の資産及び負債・純資産

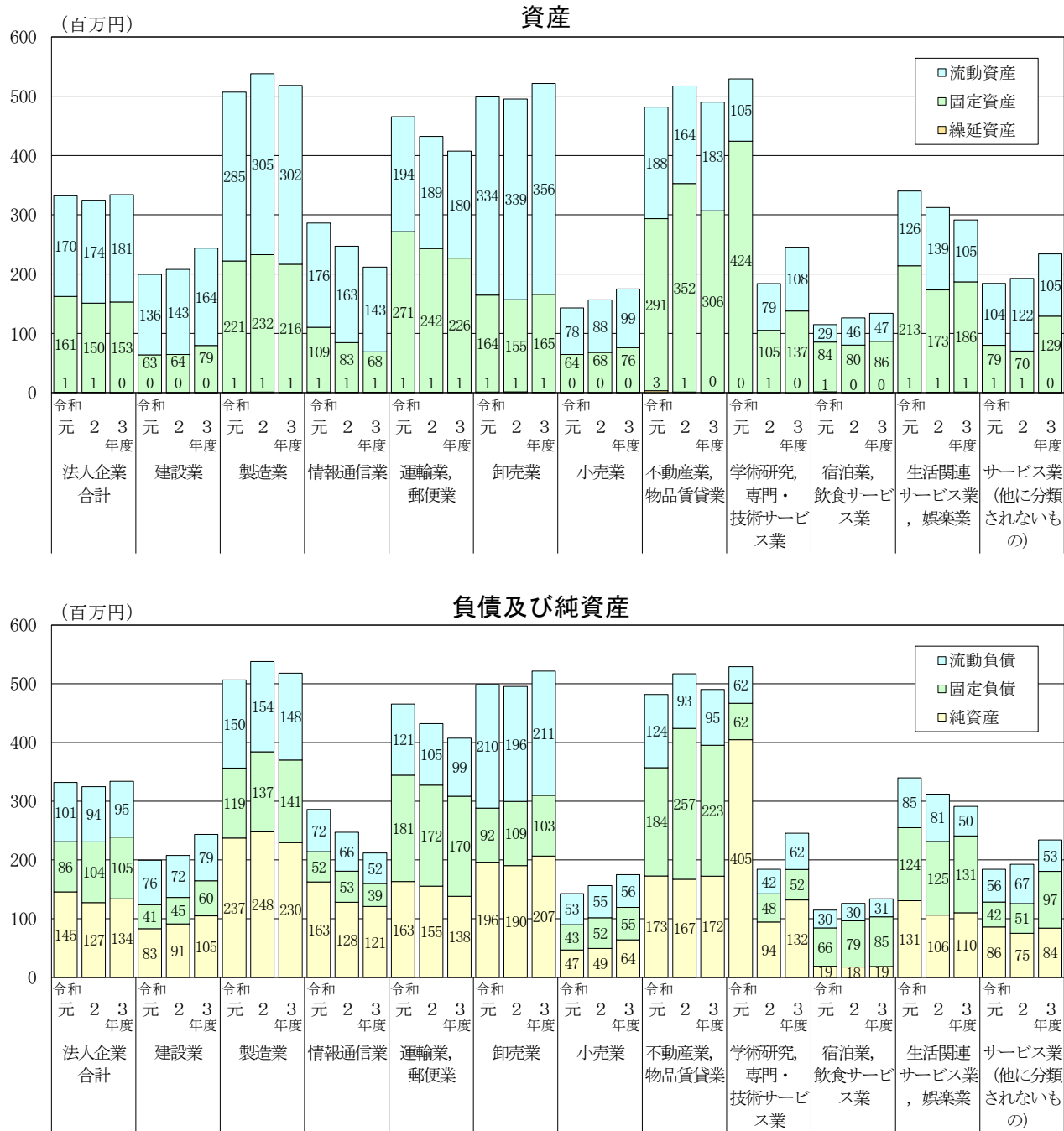
- 法人企業の資産の産業大分類別構成比は、製造業（22.1%）が最も高く、次いで不動産業、物品賃貸業（19.0%）、卸売業（16.6%）の順である。
- 法人企業の1企業当たりの資産は3.3億円で、前年度の3.2億円から2.8%増加している。資産の内訳をみると、流動資産は1.8億円（前年度比4.1%増）、固定資産は1.5億円（同1.5%増）である。
- 法人企業の1企業当たりの負債は2.0億円（前年度比1.3%増）、純資産は1.3億円（同5.3%増）である。
- 法人企業の1企業当たりの資産を産業大分類別にみると、卸売業（5.2億円）が最も高く、次いで製造業（5.2億円）、不動産業、物品賃貸業（4.9億円）の順である。

第2-1図 中小企業（法人企業）の資産構成比の推移（産業大分類別）



（注）集計表第2-1表参照。

第2-2図 中小企業（法人企業）の1企業当たりの資産及び負債・純資産（産業大分類別）



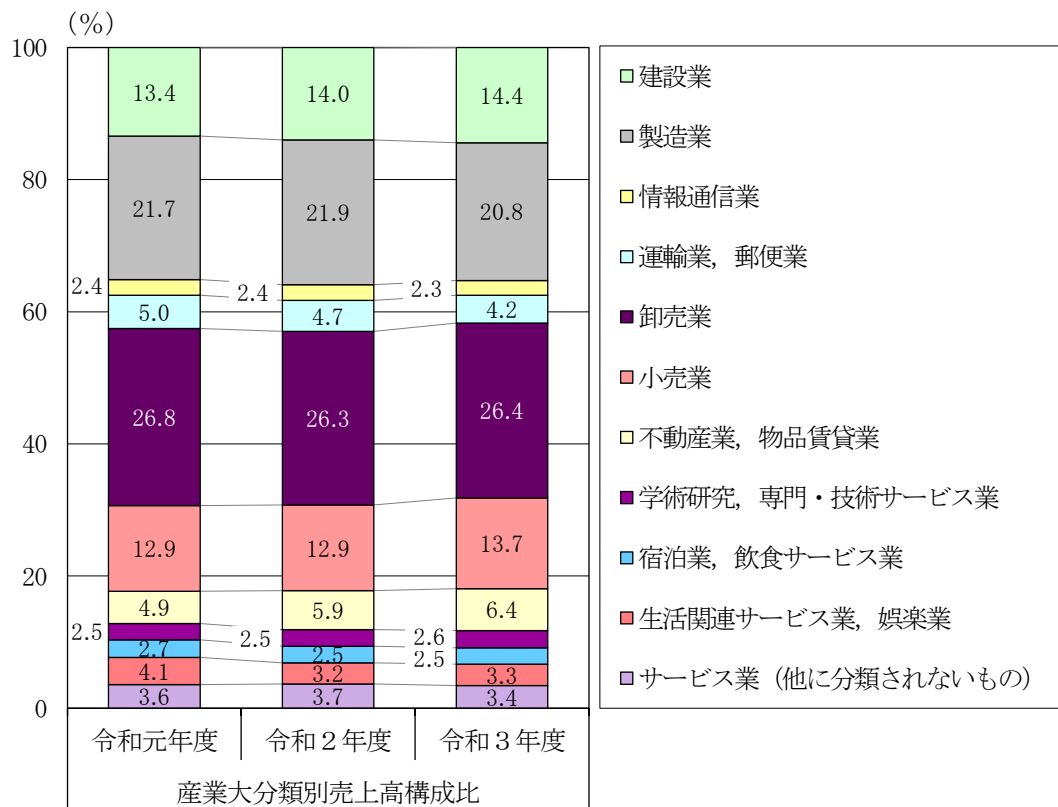
(注) 集計表第2-2表参照。

第3章 中小企業の売上高及び営業費用

1. 中小企業の売上高

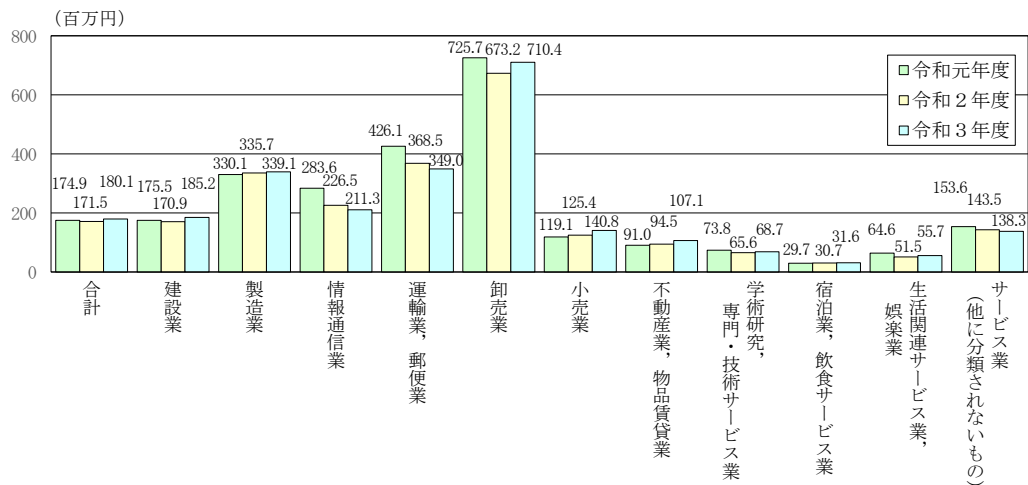
- ・ 中小企業の売上高の産業大分類別構成比は、卸売業（26.4％）が最も高く、次いで製造業（20.8％）、建設業（14.4％）の順である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの売上高は、1.8億円（前年度比5.0％増）である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの売上高の変化を産業大分類別にみると、増加しているのは、不動産業、物品賃貸業（前年度比13.3％増）、小売業（同12.3％増）など8産業である。

第3－1図 中小企業の売上高構成比の推移（産業大分類別）



（注）集計表第3－1表参照。

第3-2図 中小企業の1企業当たりの売上高（産業大分類別）

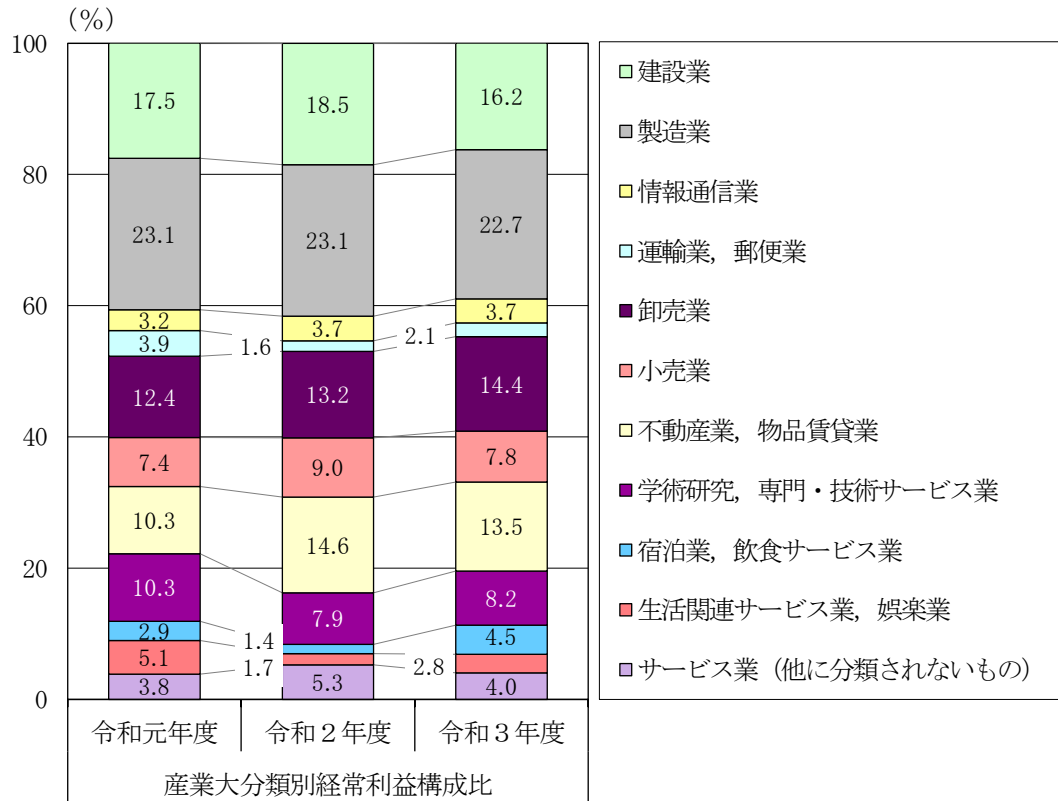


(注) 集計表第3-2表参照。

2. 中小企業の経常利益

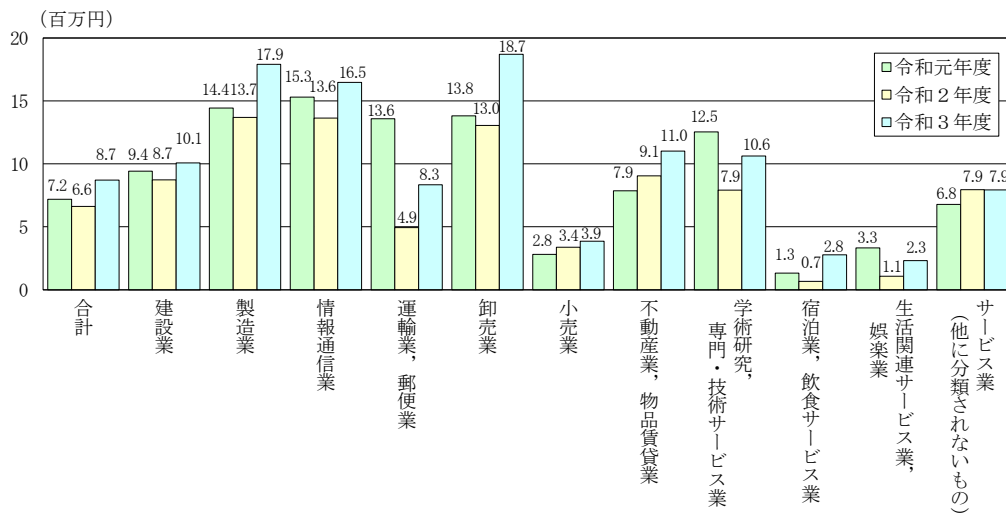
- ・ 中小企業の経常利益の産業大分類別構成比は、製造業（22.7%）が最も高く、次いで建設業（16.2%）、卸売業（14.4%）の順である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの経常利益は、871万円（前年度比31.4%増）である。
- ・ 中小企業の1企業当たりの経常利益の変化を産業大分類別にみると、増加しているのは、宿泊業、飲食サービス業（前年度比319.8%増）、生活関連サービス業、娯楽業（同116.3%増）など10産業である。

第3-3図 中小企業の経常利益構成比の推移（産業大分類別）



(注) 集計表第3-3表参照。

第3-4図 中小企業の1企業当たりの経常利益（産業大分類別）

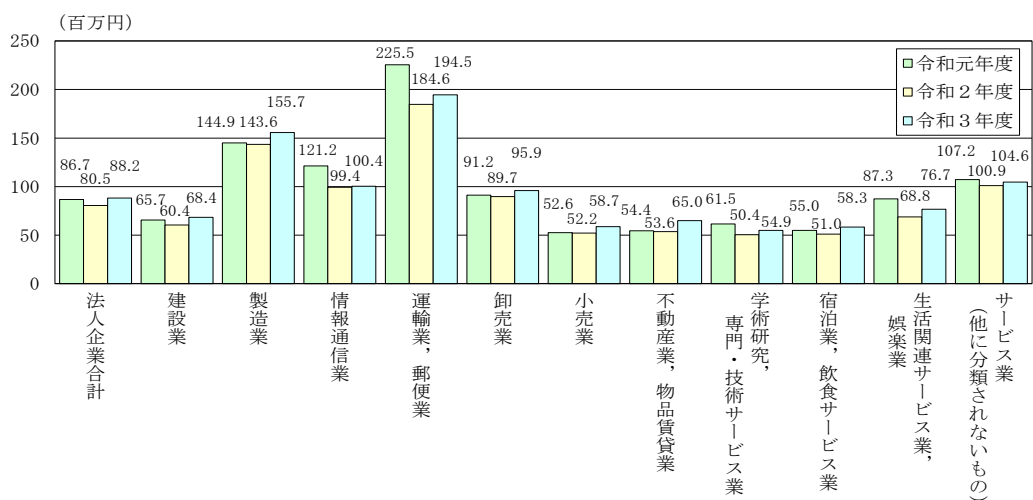


(注) 集計表第3-4表参照。

3. 中小企業（法人企業）の付加価値額

- 法人企業の1企業当たりの付加価値額は、0.9億円（前年度比9.6%増）である。産業大分類別にみると、不動産業、物品賃貸業（同21.3%増）、宿泊業、飲食サービス業（同14.3%増）など全産業で増加している。
- 法人企業の従業者1人当たりの付加価値額は、581万円（前年度比11.6%増）である。産業大分類別にみると、不動産業、物品賃貸業（同24.7%増）、建設業（同14.7%増）など全産業で増加している。

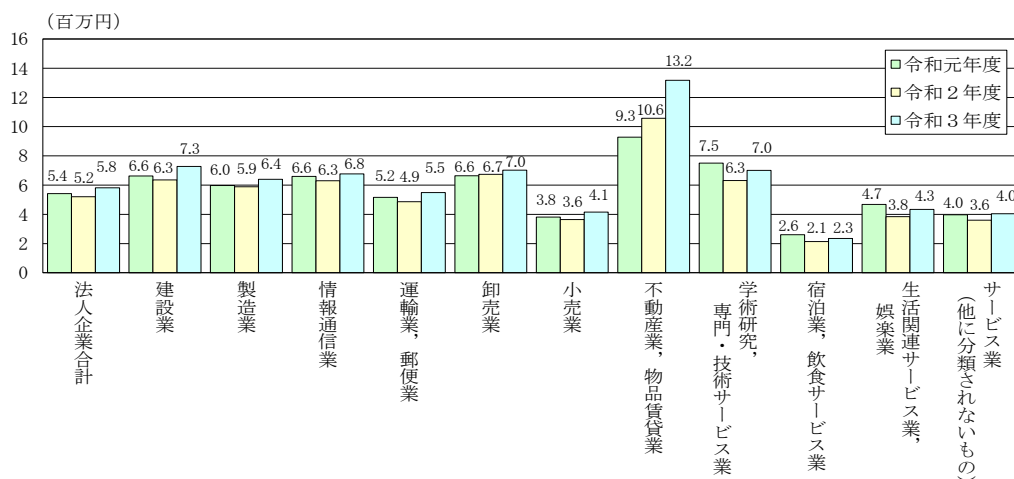
第3-5図 中小企業（法人企業）の1企業当たりの付加価値額（産業大分類別）



（注1）付加価値額は、令和3年度と令和2年度以前で算出方法が異なる。算出方法の詳細は、付録における経営指標の算出式及び全産業加重平均値（注1）を参照（以下、同様）。

（注2）集計表第3-6表参照。

第3-6図 中小企業（法人企業）の従業者1人当たりの付加価値額（産業大分類別）

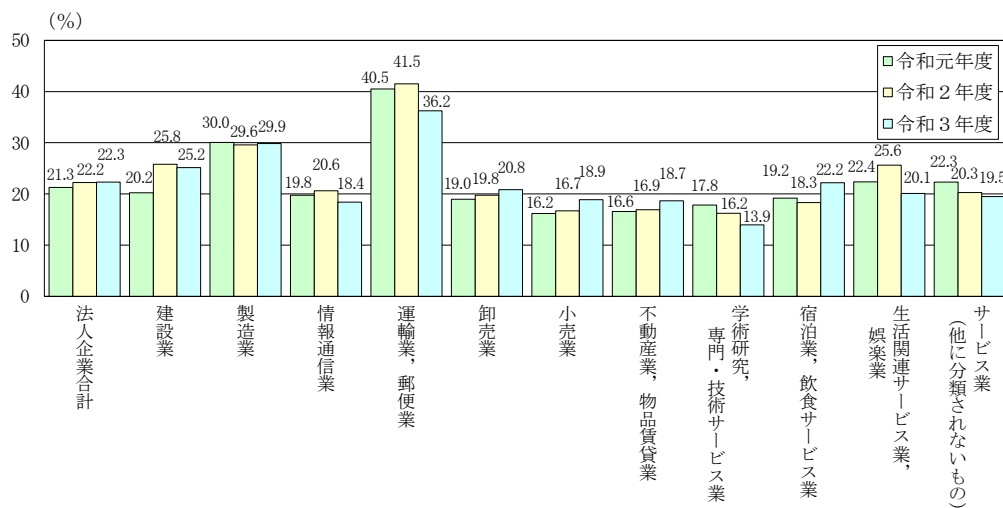


（注）集計表第3-7表参照。

第4章 中小企業（法人企業）の設備投資とリースに関する状況

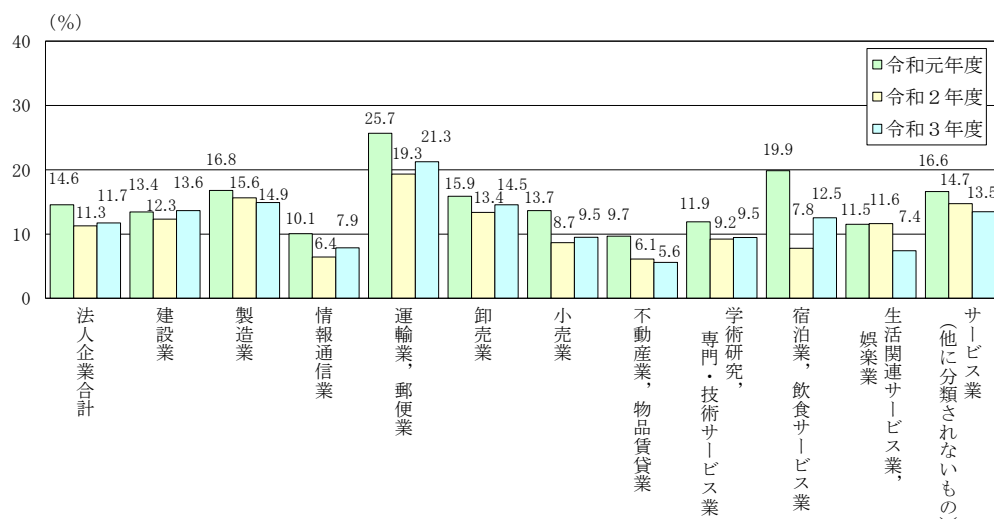
- ・設備投資を行った法人企業の割合は、22.3%（前年度差0.1ポイント増）である。産業大分類別にみると、増加しているのは、宿泊業、飲食サービス業（同3.9ポイント増）、小売業（同2.2ポイント増）など5産業である。
- ・新規リース契約を行った法人企業の割合は、11.7%（前年度差0.5ポイント増）である。産業大分類別にみると、増加しているのは、宿泊業、飲食サービス業（同4.7ポイント増）、運輸業、郵便業（同1.9ポイント増）など7産業である。

第4-1図 設備投資を行った中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）



（注）集計表第4-1表参照。

第4-2図 新規リース契約を行った中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）



（注1）新規リース契約には、契約更新を含む。

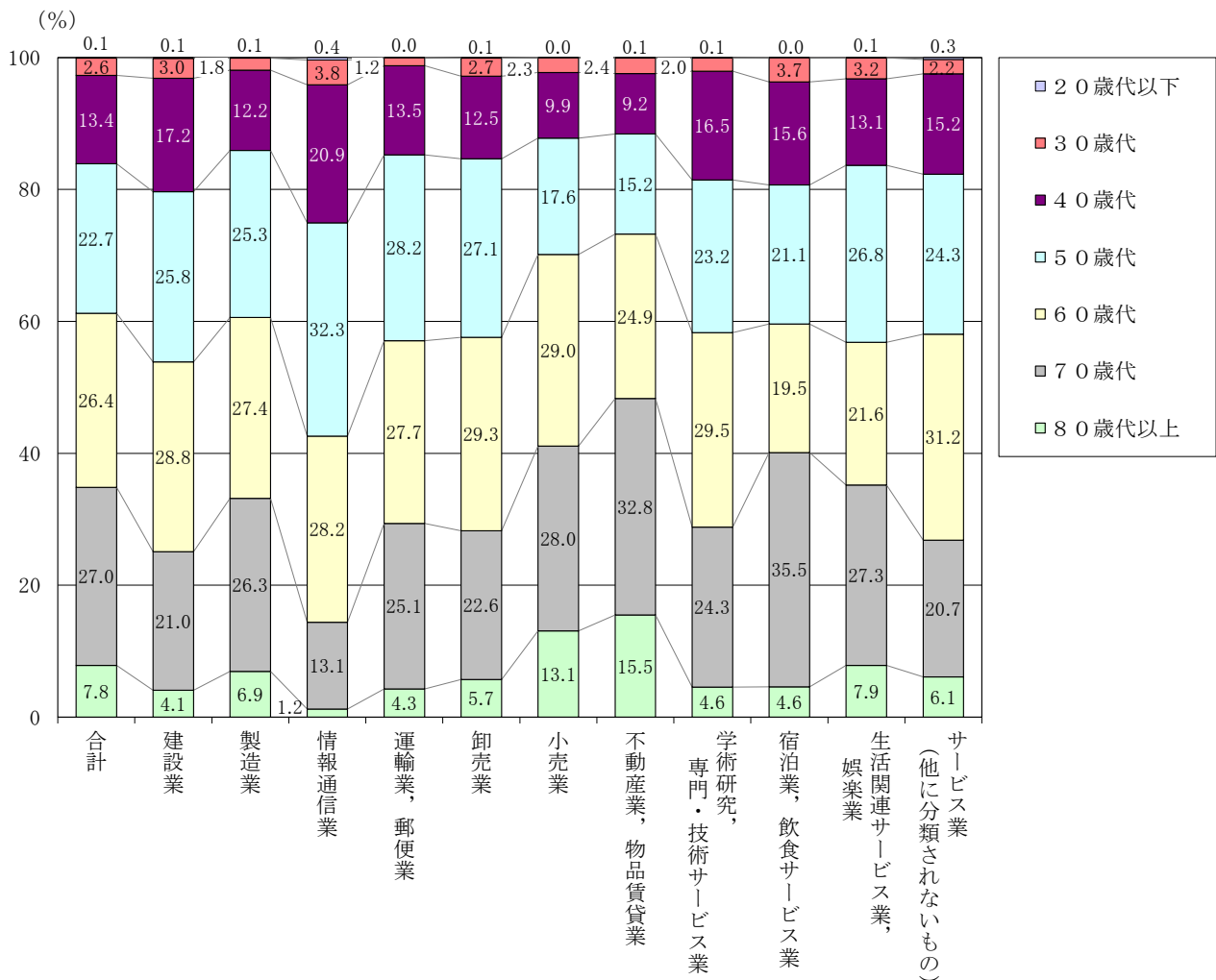
（注2）集計表第4-2表参照。

第5章 中小企業の事業承継に関する状況

1. 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の年齢

- ・ 中小企業の社長（個人事業主を含む。以下この章において同じ。）の年齢別構成比は、「70歳代」（27.0%）が最も高く、次いで「60歳代」（26.4%）、「50歳代」（22.7%）の順である。
- ・ 中小企業の社長の年齢別構成比を産業大分類別にみると、60歳代以上は不動産業、物品賃貸業（73.2%）が最も高く、50歳代以下は情報通信業（57.4%）が最も高い。

第5-1図 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の年齢別構成比（産業大分類別）

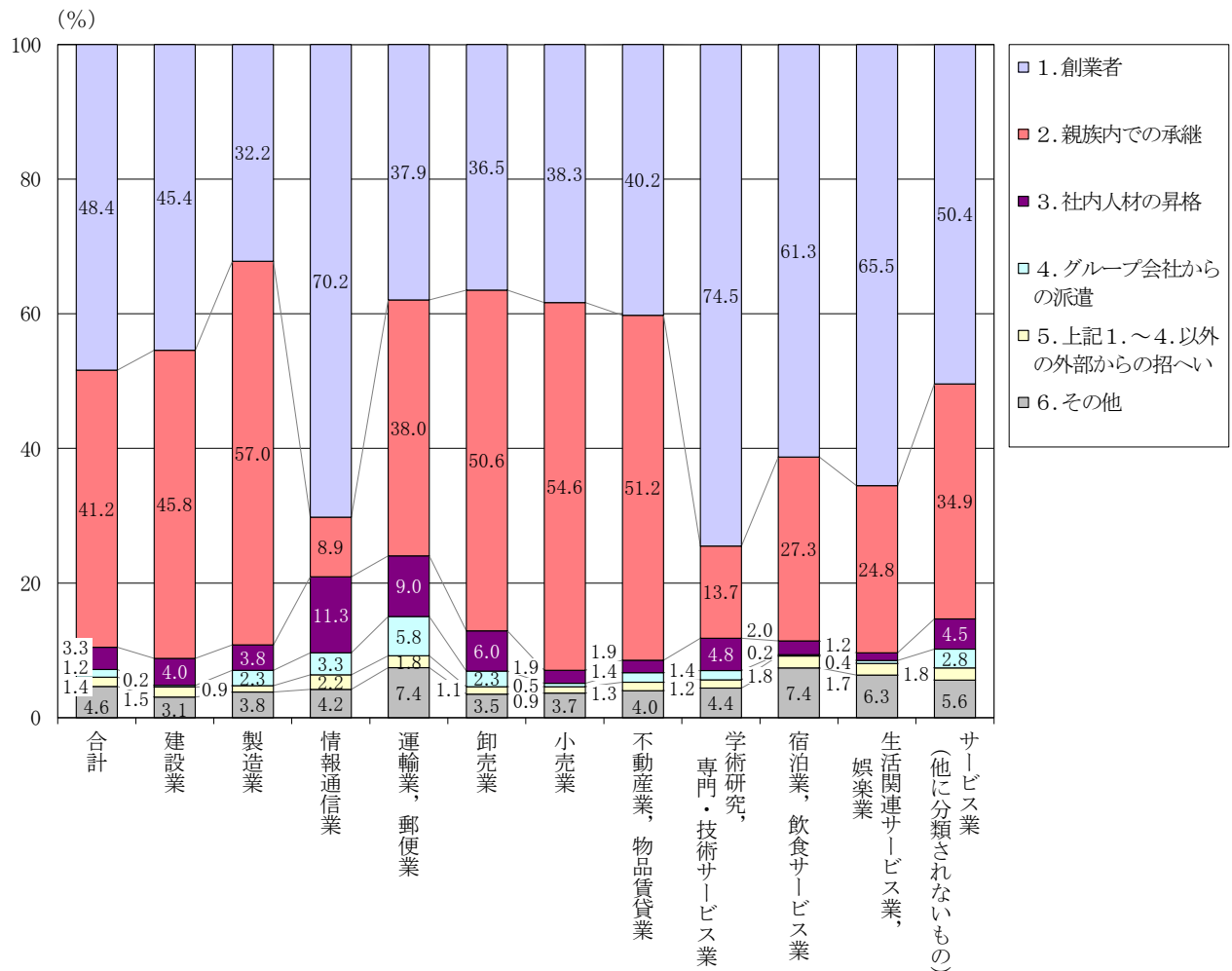


(注) 集計表第5-1表参照。

2. 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の就任経緯

- ・ 中小企業の社長の就任経緯別構成比は、「創業者」（48.4%）、「親族内での承継」（41.2%）が高い。
- ・ 中小企業の社長の就任経緯別構成比を産業大分類別にみると、「創業者」は、学術研究，専門・技術サービス業（74.5%）、情報通信業（70.2%）などで高く、「親族内での承継」は、製造業（57.0%）、小売業（54.6%）などで高い。

第5－2図 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の就任経緯別構成比（産業大分類別）

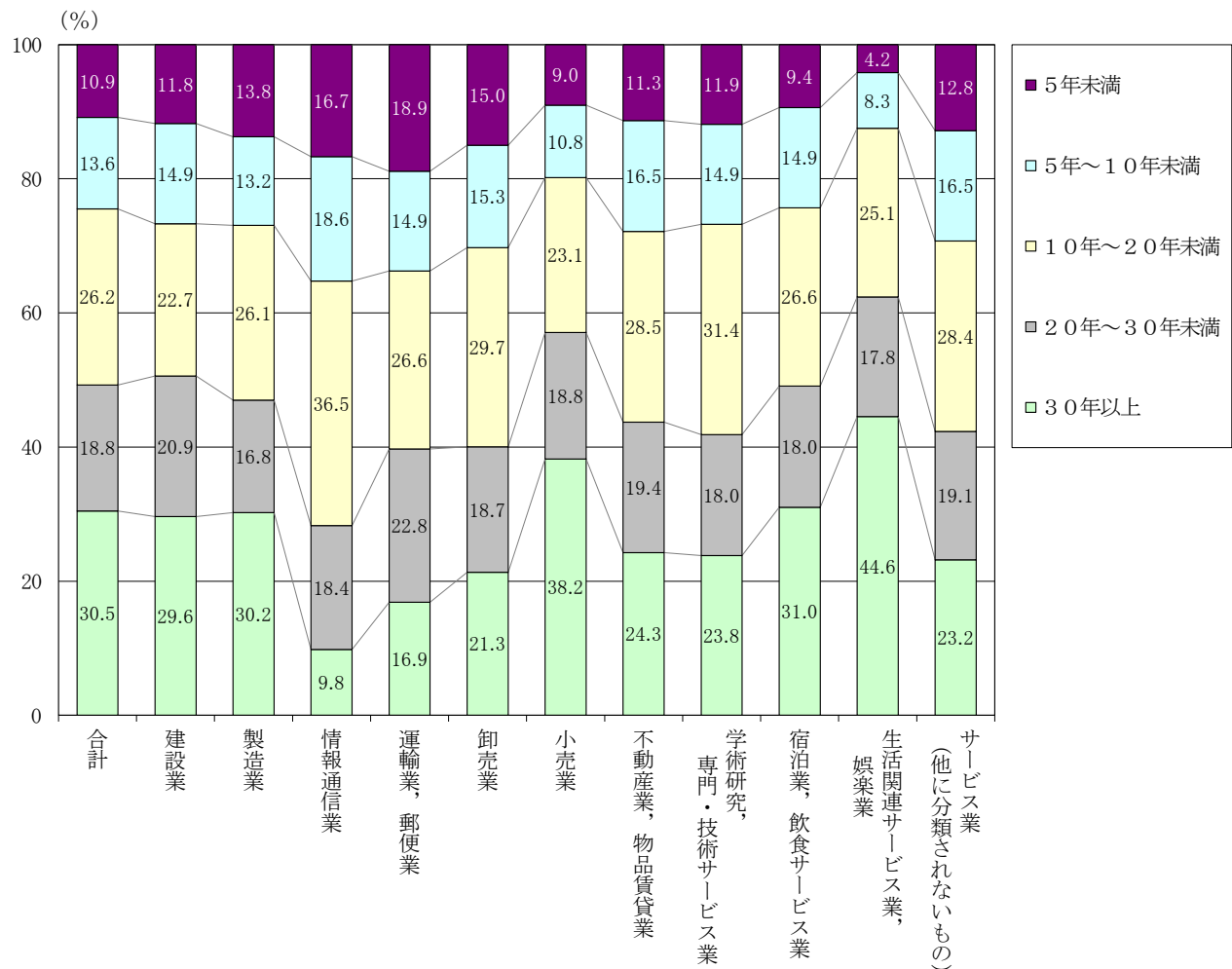


(注) 集計表第5－2表参照。

3. 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の在任期間

- ・ 中小企業の社長の在任期間別構成比は、「30年以上」（30.5%）が最も高く、次いで「10年～20年未満」（26.2%）、「20年～30年未満」（18.8%）の順である。
- ・ 中小企業の社長の在任期間別構成比を産業大分類別にみると、「30年以上」は、生活関連サービス業、娯楽業（44.6%）が最も高く、20年未満は、情報通信業（71.7%）が最も高い。

第5－3図 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の在任期間別構成比（産業大分類別）

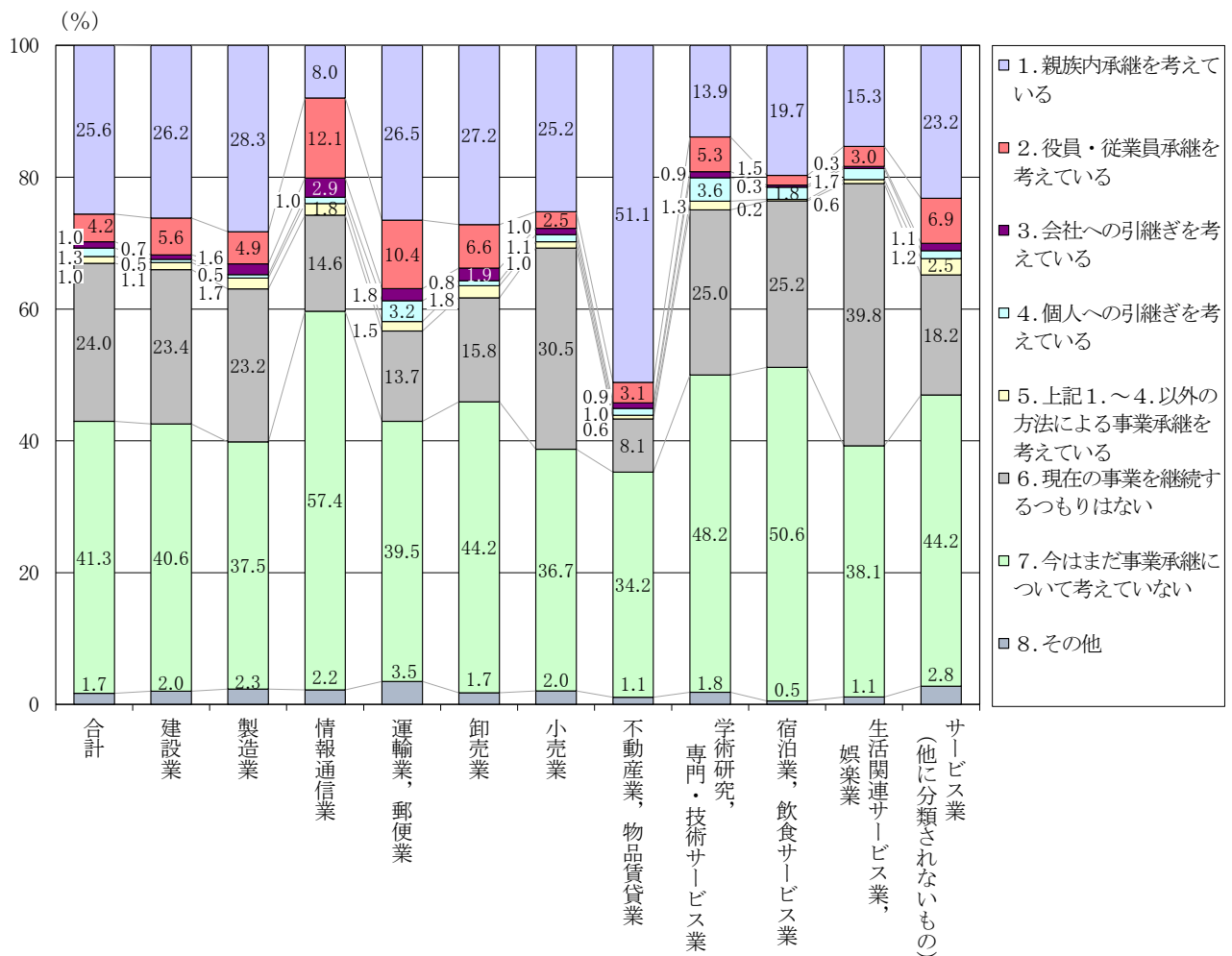


(注) 集計表第5－3表参照。

4. 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の事業承継の意向

- ・ 中小企業の社長における事業承継の意向別構成比は、「今はまだ事業承継について考えていない」（４１．３％）が最も高く、次いで「親族内承継を考えている」（２５．６％）、「現在の事業を継続するつもりはない」（２４．０％）の順である。
- ・ 中小企業の社長における事業承継の意向別構成比を産業大分類別にみると、「今はまだ事業承継について考えていない」は、情報通信業（５７．４％）が最も高く、「親族内承継を考えている」は、不動産業、物品賃貸業（５１．１％）が最も高い。

第５－４図 中小企業の社長（個人事業主を含む。）の事業承継の意向別構成比（産業大分類別）



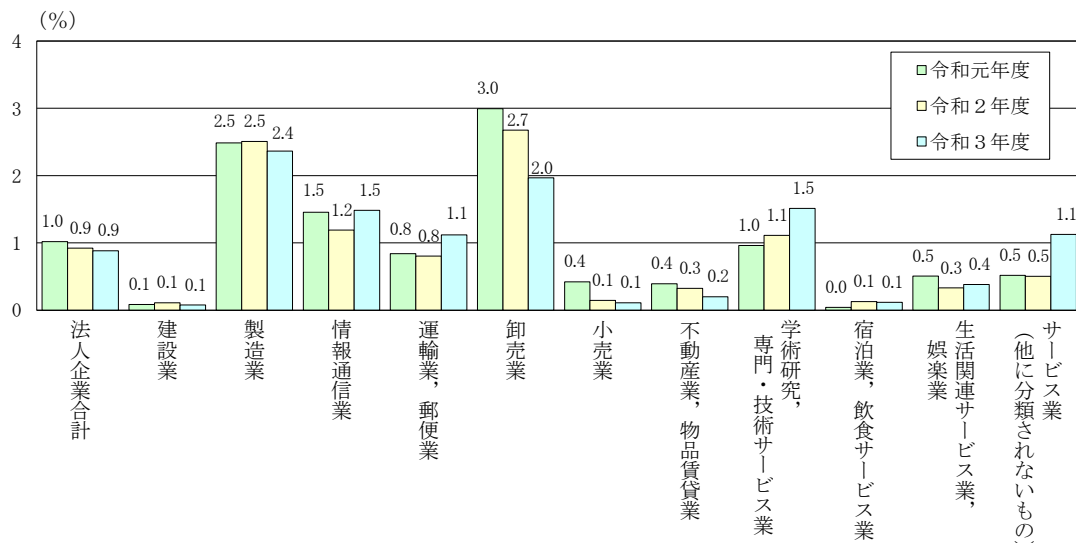
(注) 集計表第５－４表参照。

第6章 中小企業の海外展開と輸出の状況

1. 中小企業（法人企業）の海外展開

- ・ 海外に子会社*¹、関連会社*²又は事業所*³がある法人企業の割合は、0.9%（前年度差▲0.0ポイント減）である。産業大分類別にみると、製造業（2.4%）が最も高く、次いで、卸売業（2.0%）、学術研究，専門・技術サービス業（1.5%）の順である。
- ・ 海外の子会社数、関連会社数の地域別構成比をみると、子会社では、「アジア」（67.9%）が最も高く、次いで「その他の地域」（16.0%）、「北米」（8.1%）の順である。関連会社では、「アジア」（60.3%）が最も高く、次いで「ヨーロッパ」（22.1%）、「北米」（9.0%）の順である。

第6-1図 海外に子会社、関連会社又は事業所がある中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）



（注）集計表第6-1表参照。

第6-2図 中小企業（法人企業）の海外の子会社数、関連会社数の地域別構成比



（注）集計表第6-2表参照。

*¹ 海外の子会社とは、調査回答企業が50%超の議決権を所有する海外にある会社をいう。また、調査回答企業の子会社又は調査回答会社とその子会社合計で50%超の議決権を所有する会社も含む。ただし、50%以下であっても調査回答企業が経営を実質的に支配している会社も含む。

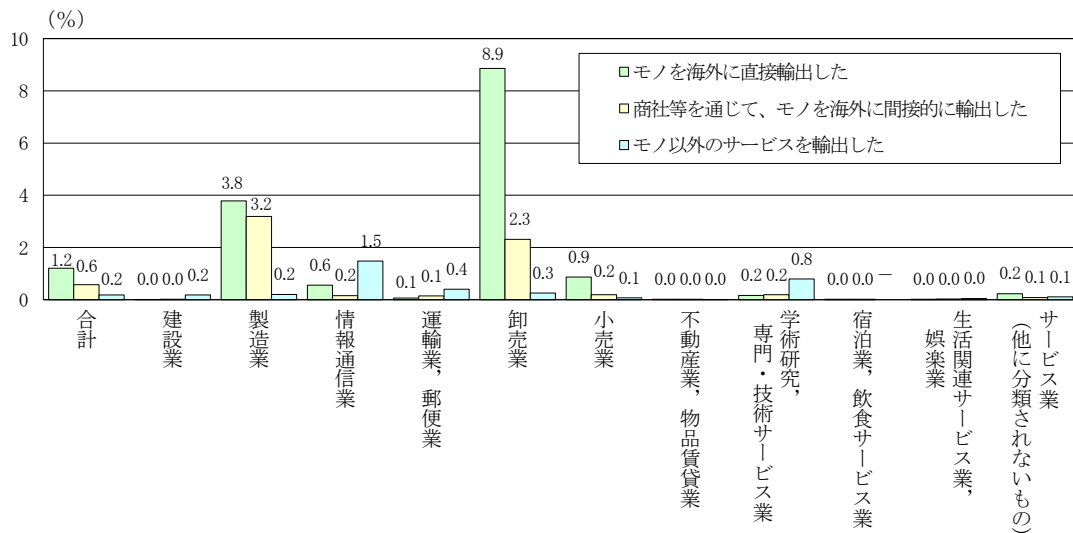
*² 海外の関連会社とは、調査回答企業が20%以上から50%以下の議決権を有する海外にある会社をいう。

*³ 海外の事業所とは、海外にある調査回答企業の支店・営業所・工場などをいう。

2. 中小企業の輸出

- モノを海外に直接輸出した中小企業の割合は1.2%、商社等を通じて、モノを海外に間接的に輸出した中小企業の割合は0.6%、モノ以外のサービスを輸出した中小企業の割合は0.2%である。
- モノを海外に直接輸出した中小企業の1企業当たりのモノの直接輸出額は、2.8億円である。産業大分類別にみると、卸売業（3.8億円）、製造業（2.4億円）の順である。

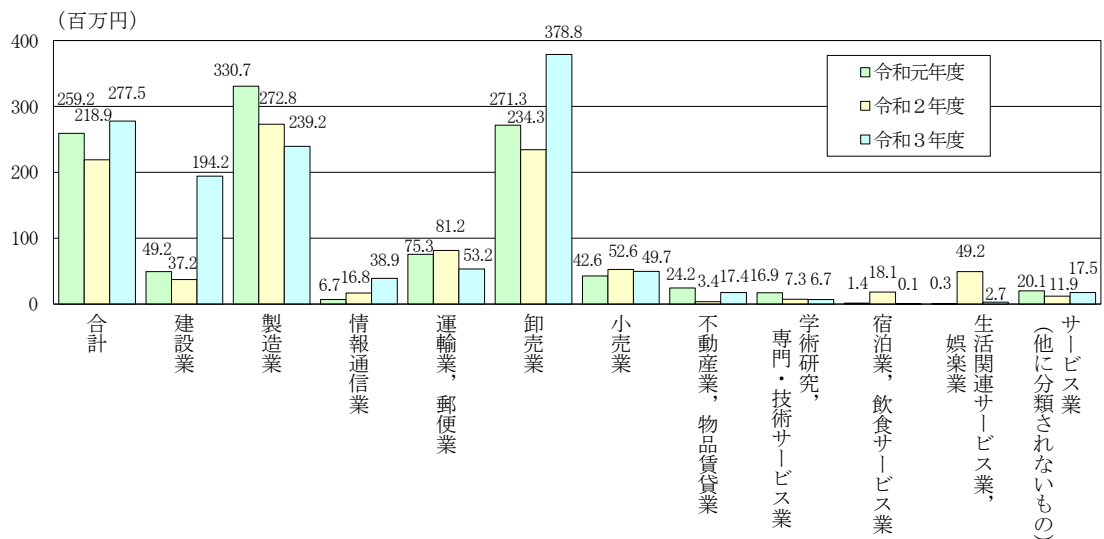
第6-3図 輸出を行った中小企業の割合（産業大分類別）



（注）集計表第6-3表参照。複数回答可。

輸出した企業の割合＝（該当企業数）÷（母集団企業数－NA（無回答））

第6-4図 中小企業の1企業当たりのモノの直接輸出額（産業大分類別）

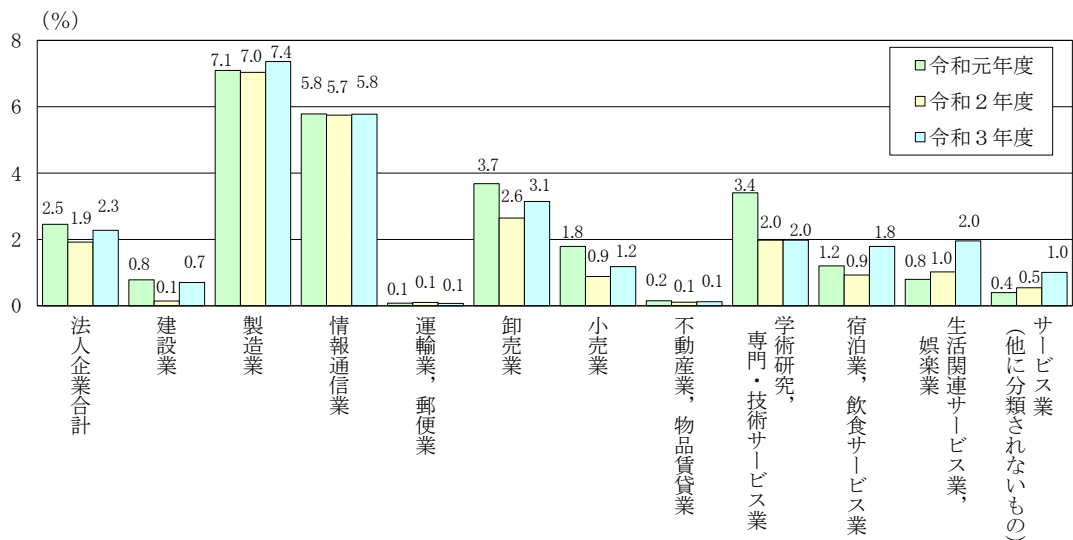


（注）集計表第6-4表参照。

第7章 中小企業（法人企業）の研究開発の状況

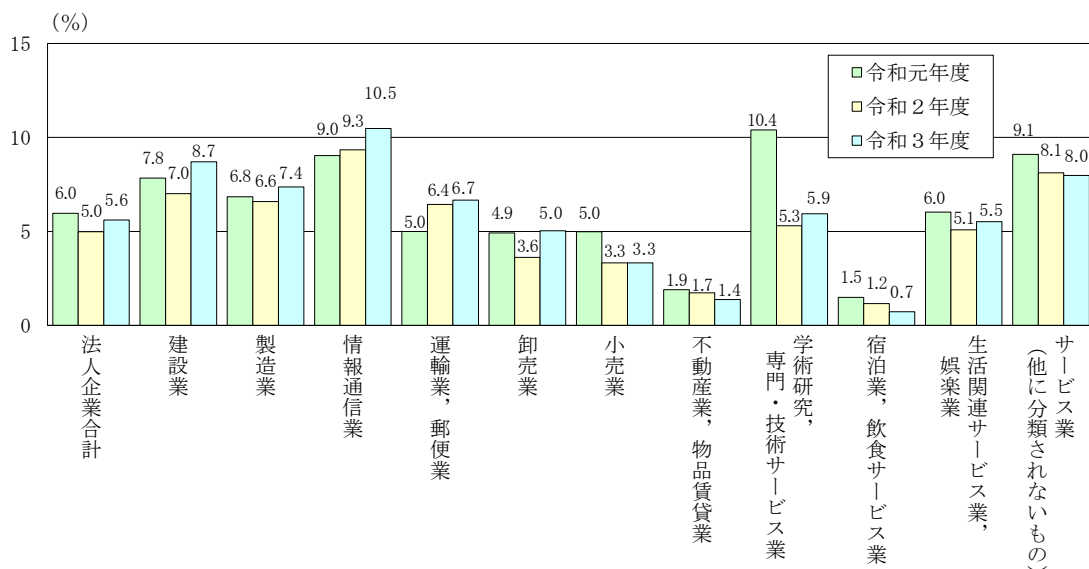
- 研究開発を行った法人企業の割合は、2.3%（前年度差0.4ポイント増）である。産業大分類別にみると、製造業（7.4%）が最も高く、次いで情報通信業（5.8%）、卸売業（3.1%）の順である。
- 能力開発を行った法人企業の割合は、5.6%（前年度差0.6ポイント増）である。産業大分類別にみると、情報通信業（10.5%）が最も高く、次いで建設業（8.7%）、サービス業（他に分類されないもの）（8.0%）の順である。

第7-1図 研究開発を行った中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）



（注）集計表第7-1表参照。

第7-2図 能力開発を行った中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）

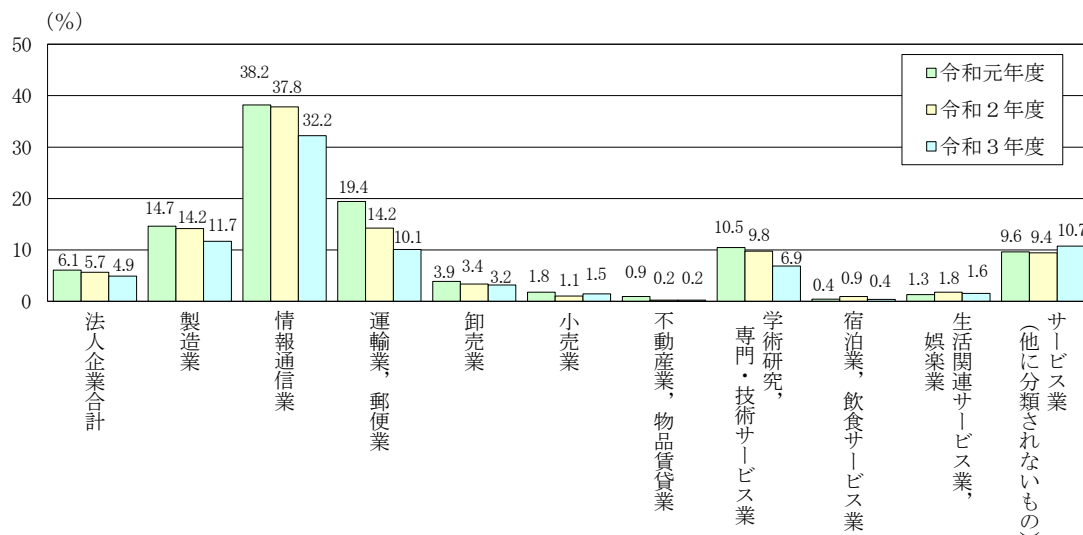


（注）集計表第7-2表参照。

第8章 中小企業（法人企業）の受託・委託の状況

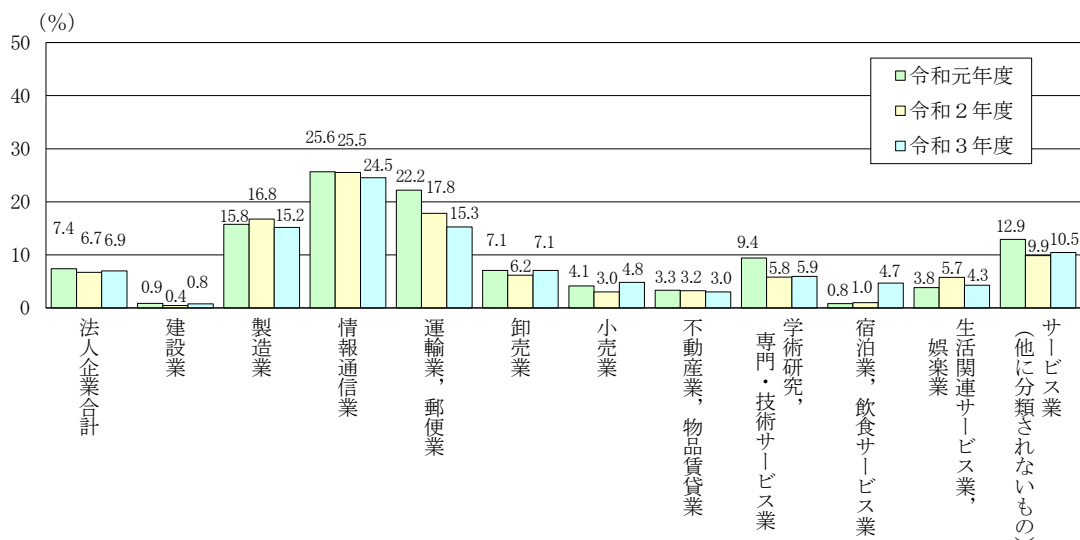
- ・ 受託があった法人企業（建設業を除く）の割合は、4.9%（前年度差▲0.7ポイント減）である。産業大分類別にみると、情報通信業（32.2%）が最も高く、次いで製造業（11.7%）、サービス業（他に分類されないもの）（10.7%）の順である。
- ・ 委託を行った法人企業の割合は、6.9%（前年度差0.3ポイント増）である。産業大分類別にみると、情報通信業（24.5%）が最も高く、次いで運輸業、郵便業（15.3%）、製造業（15.2%）の順である。

第8-1図 受託があった中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別、建設業を除く）



（注）集計表第8-1表参照。
建設工事の受託を除く。

第8-2図 委託を行った中小企業（法人企業）の割合（産業大分類別）



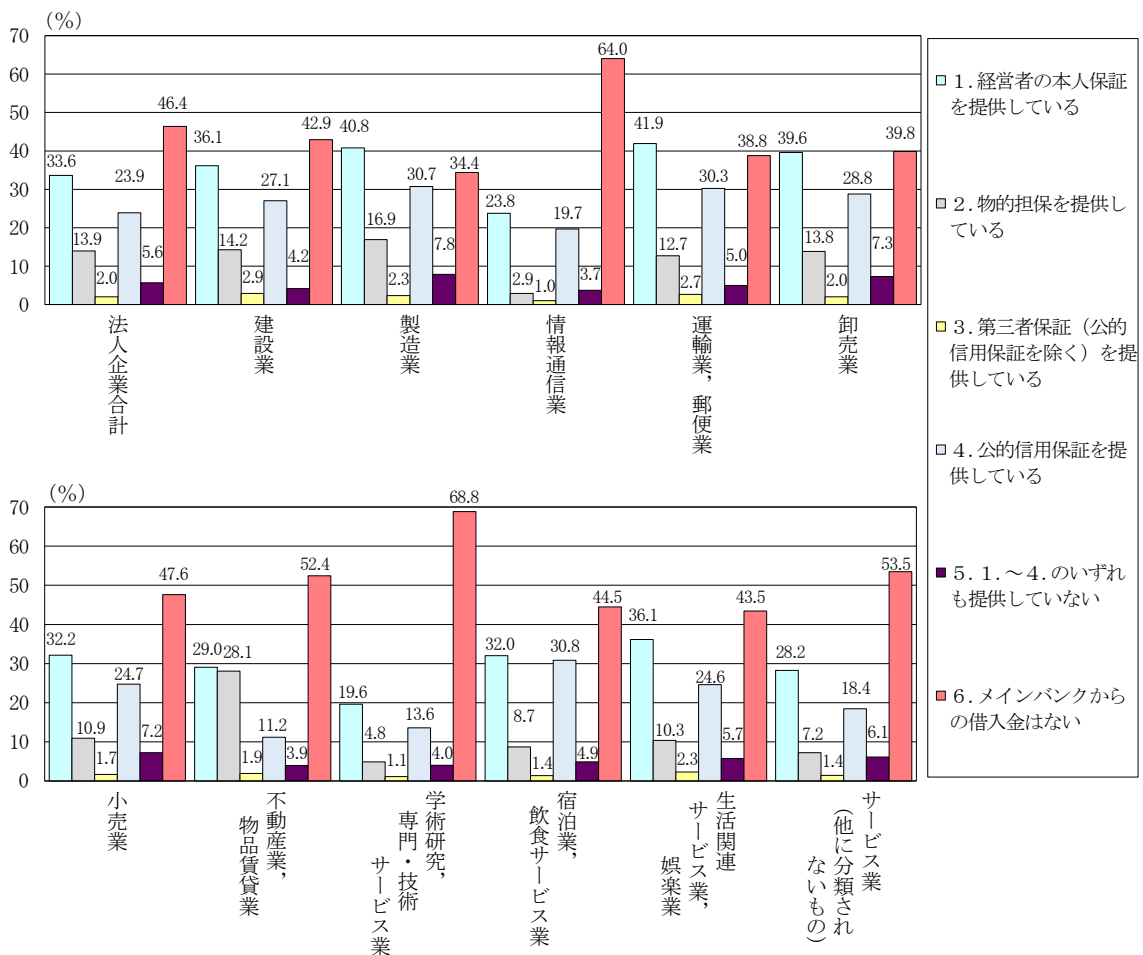
（注）集計表第8-2表参照。
建設工事の委託を除く。

第9章 中小企業（法人企業）の取引金融機関の状況

1. 中小企業（法人企業）のメインバンクからの借入条件

- ・ 法人企業のメインバンクからの借入条件別該当率は、「経営者の本人保証を提供している」（33.6%）、「公的信用保証を提供している」（23.9%）が高い。
- ・ 法人企業のメインバンクからの借入条件別該当率を産業大分類別にみると、「経営者の本人保証を提供している」は、運輸業、郵便業（41.9%）、製造業（40.8%）などで高く、「公的信用保証を提供している」は、宿泊業、飲食サービス業（30.8%）、製造業（30.7%）などで高い。

第9-1図 中小企業（法人企業）のメインバンクからの借入条件別該当率（産業大分類別）



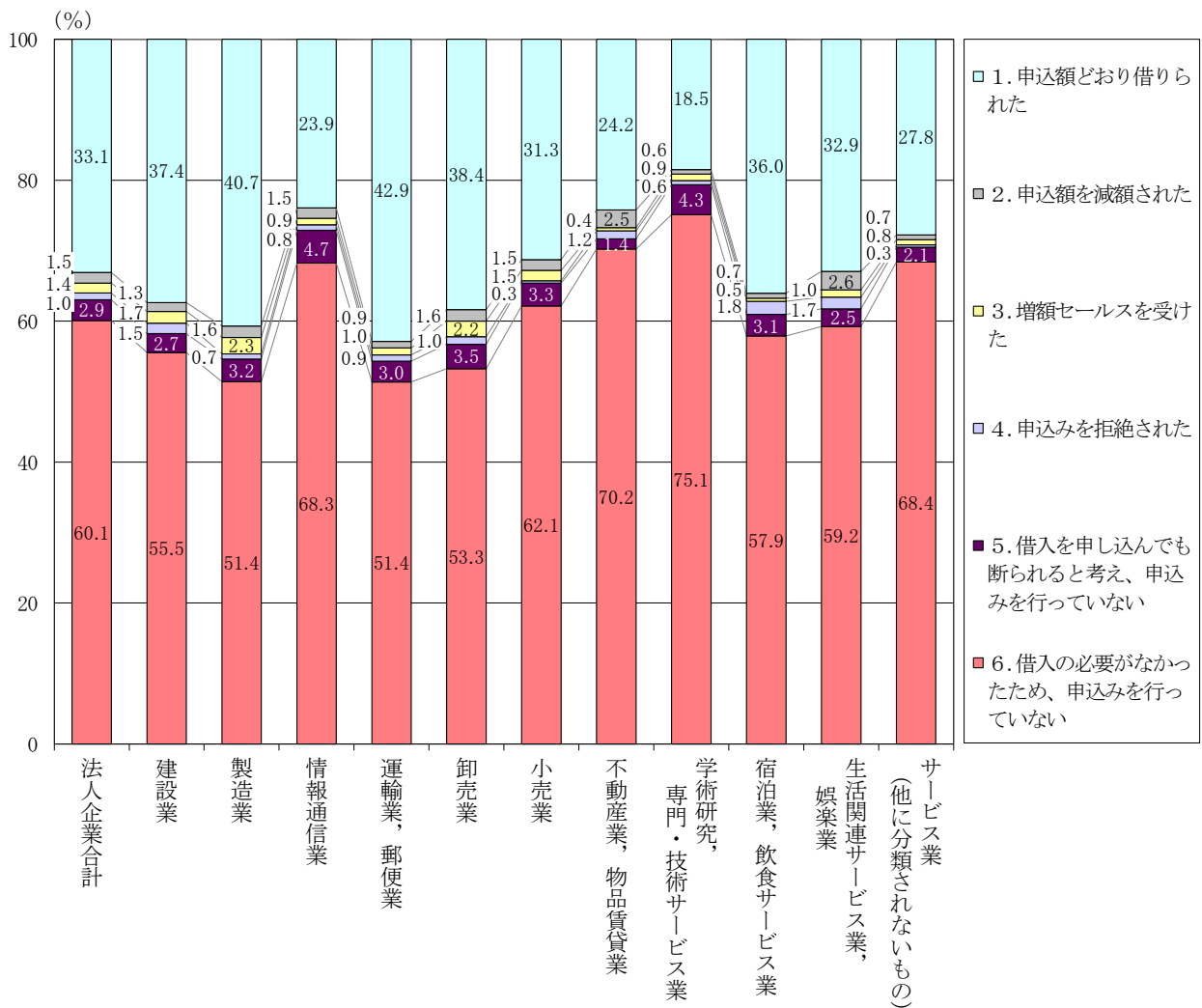
（注）集計表第9-1表参照。複数回答可。

メインバンクからの借入条件別該当率＝（該当企業数）÷（母集団企業数－NA（無回答））

2. 中小企業（法人企業）のメインバンクへの借入申込みの対応

- ・ 法人企業の最近1年間のメインバンクへの借入申込みの最も多かった対応別構成比をみると、「申込額どおり借りられた」（33.1%）、「申込額を減額された」（1.5%）などが挙げられる。
- ・ 法人企業の最近1年間のメインバンクへの借入申込みの最も多かった対応別構成比を産業大分類別にみると、「申込額どおり借りられた」は、運輸業、郵便業（42.9%）、製造業（40.7%）などで高く、「申込額を減額された」は、生活関連サービス業、娯楽業（2.6%）が最も高い。

第9－2図 中小企業（法人企業）のメインバンクへの借入申込みの最も多かった対応別構成比（産業大分類別）



（注）集計表第9－2表参照。

第10章 中小企業（法人企業）の経営指標

- ・ 経営効率を示す指標である自己資本当期純利益率（ROE）は8.29%で、前年度より0.88ポイント高い。
- ・ 企業の経常的な事業活動による収益性を示す指標である売上高経常利益率は4.26%で、前年度より1.00ポイント高い。
- ・ 総資本が効率的に活用されているかを示す指標である総資本回転率は0.98回で、前年度より0.01ポイント高い。
- ・ 財務の安定性を示す指標である自己資本比率は40.13%で、前年度より0.93ポイント高い。

経営指標の算出式及び全産業加重平均値

観点	経営指標名	算出式	令和元年度 全産業 加重平均値	令和2年度 全産業 加重平均値	令和3年度 全産業 加重平均値
A. 総合力	(1) 自己資本当期純利益率（ROE）	当期純利益 ÷ 純資産 × 100	7.35(%)	7.40(%)	8.29(%)
B. 収益性	(2) 売上高経常利益率	経常利益 ÷ 売上高 × 100	3.56(%)	3.25(%)	4.26(%)
C. 効率性	(3) 総資本回転率	売上高 ÷ 総資本(総資産)	1.05(回)	0.97(回)	0.98(回)
D. 安全性	(4) 自己資本比率	純資産 ÷ 総資本(総資産) × 100	43.80(%)	39.21(%)	40.13(%)
E. 健全性	(5) 財務レバレッジ	総資本(総資産) ÷ 純資産	2.28(倍)	2.55(倍)	2.49(倍)
F. 生産性	(6) 付加価値比率	付加価値額 ÷ 売上高 × 100	24.85(%)	25.54(%)	26.93(%)

(注1) 付加価値額（令和3年度）

＝（売上原価のうち労務費、動産・不動産賃借料、減価償却費）
 ＋（販売費及び一般管理費のうち人件費、動産・不動産賃借料、減価償却費、租税公課）
 ＋（営業外費用のうち支払利息・割引料）＋経常利益
 ＋能力開発費（従業員教育費）

付加価値額（令和2年度以前）

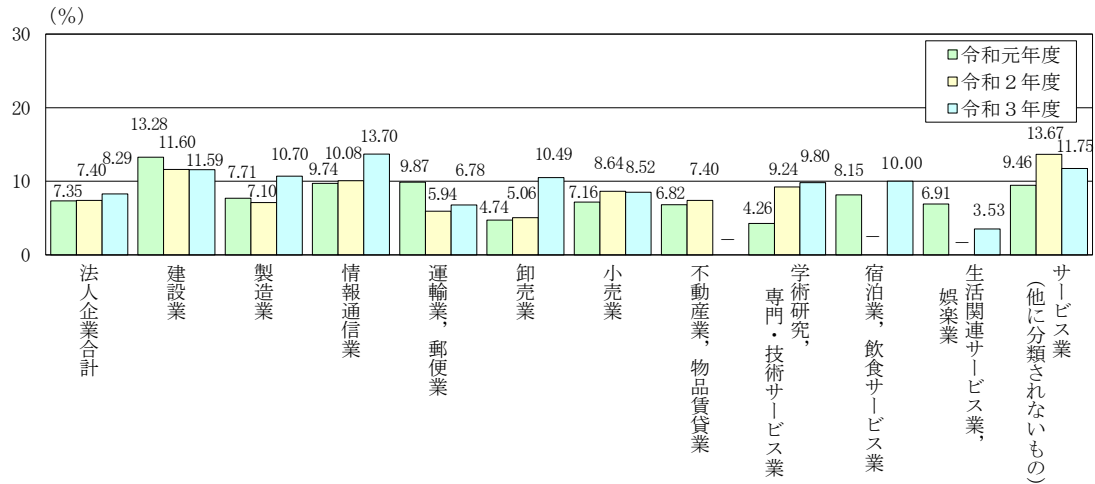
＝（売上原価のうち労務費、減価償却費）
 ＋（販売費及び一般管理費のうち人件費、地代家賃、減価償却費、租税公課）
 ＋（営業外費用のうち支払利息・割引料）＋経常利益
 ＋能力開発費（従業員教育費）

(注2) 全産業加重平均値とは、各費目の中小企業全体の合算値を用いて計算したものである。

(注3) 産業大分類別の経営指標については、集計表第10-1表参照。

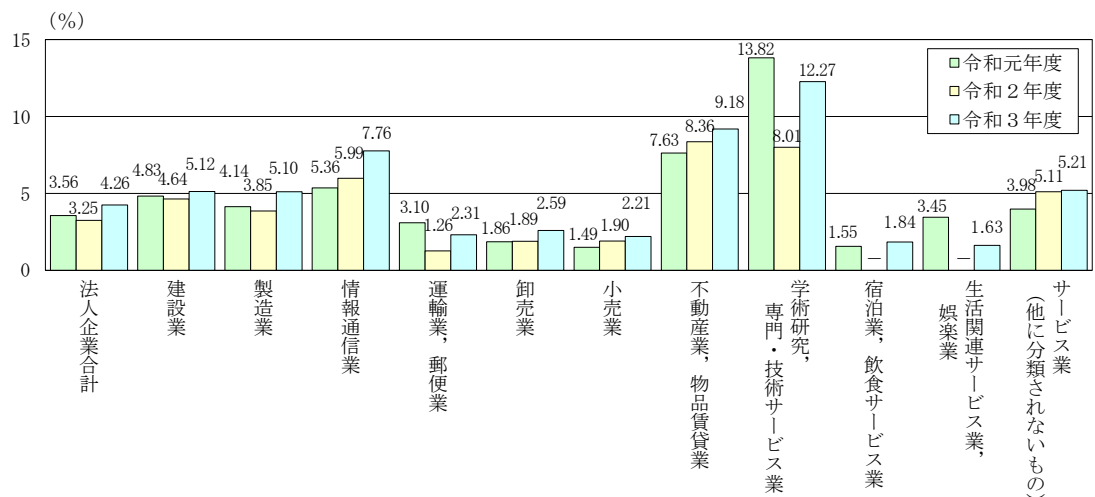
(注4) 桁数の関係で前年度差は、次ページ以降のグラフの値で計算する場合と一致しない場合がある。

第10-1図 自己資本当期純利益率（ROE）（産業大分類別）



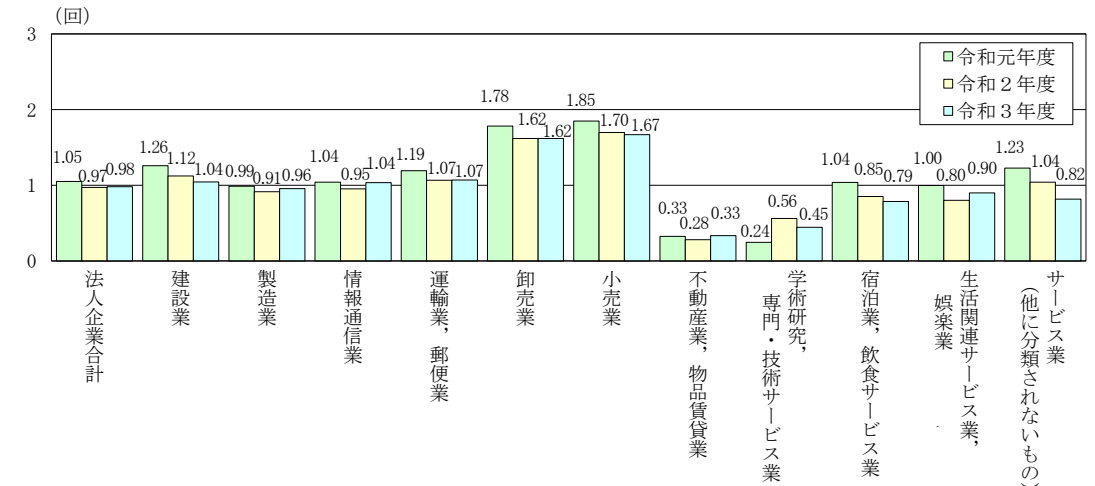
（注）集計表第10-1表、第10-2表参照。
算出に使用する費目が負値などの場合には「-」と表示（以下、同様）。

第10-2図 売上高経常利益率（産業大分類別）



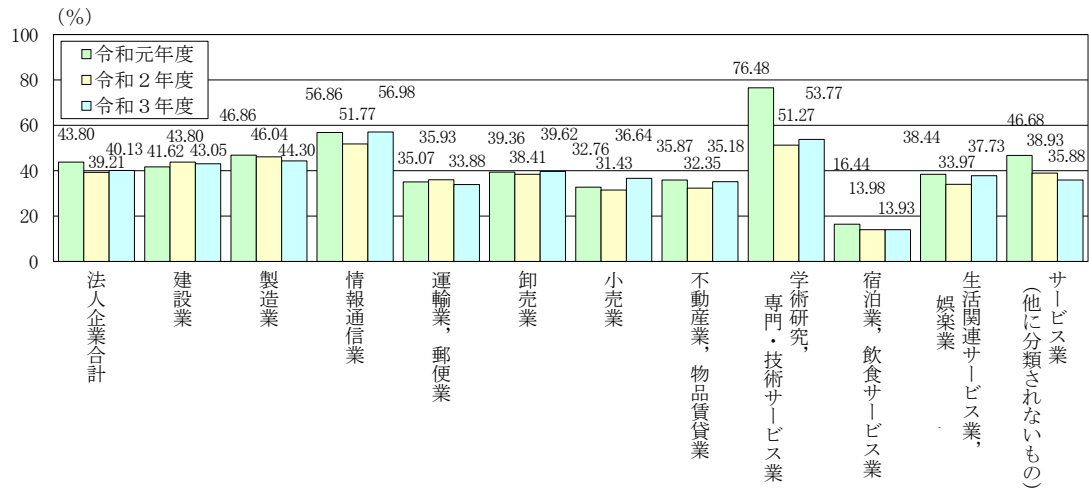
（注）集計表第10-1表、第10-3表参照。

第10-3図 総資本回転率（産業大分類別）



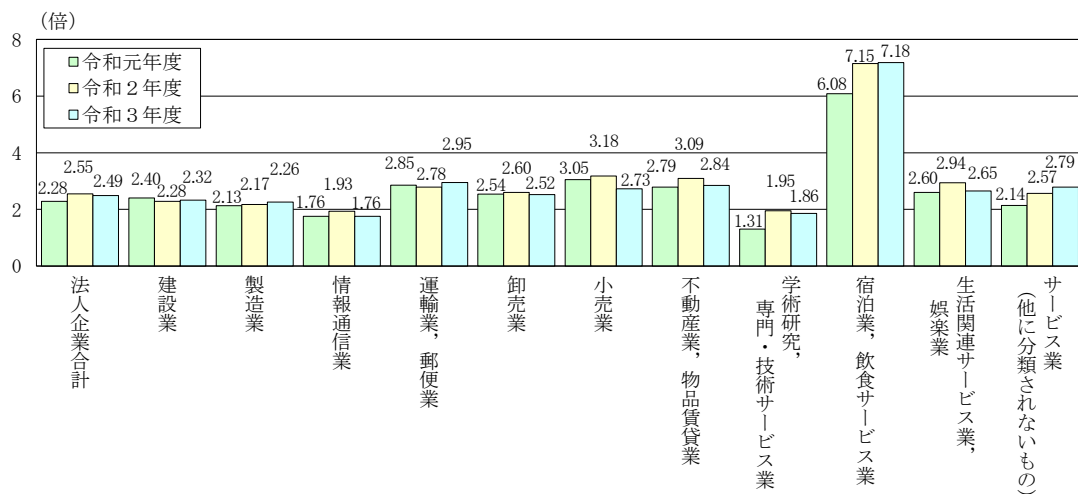
（注）集計表第10-1表、第10-4表参照。

第10-4図 自己資本比率（産業大分類別）



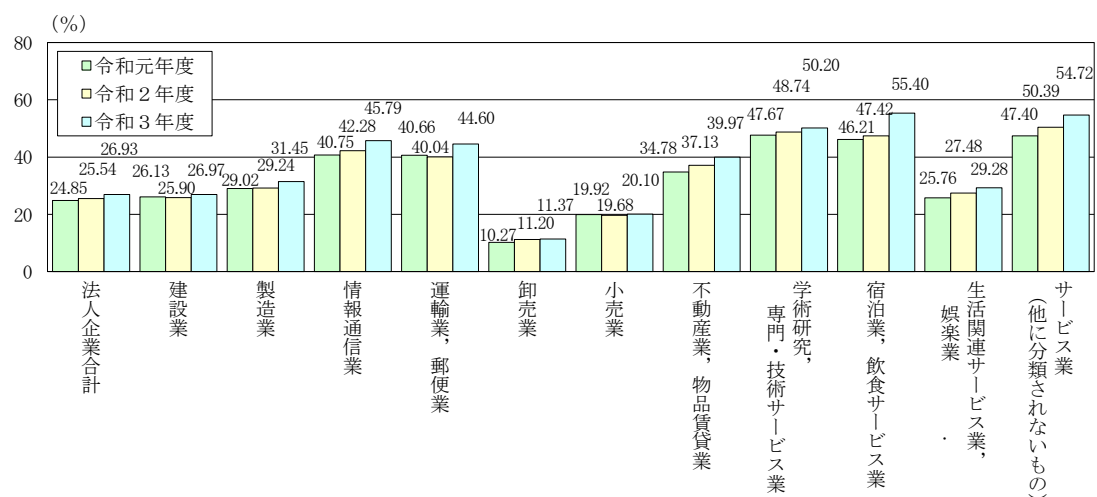
(注) 集計表第10-1表、第10-5表参照。

第10-5図 財務レバレッジ（産業大分類別）



(注) 集計表第10-1表、第10-6表参照。

第10-6図 付加価値比率（産業大分類別）



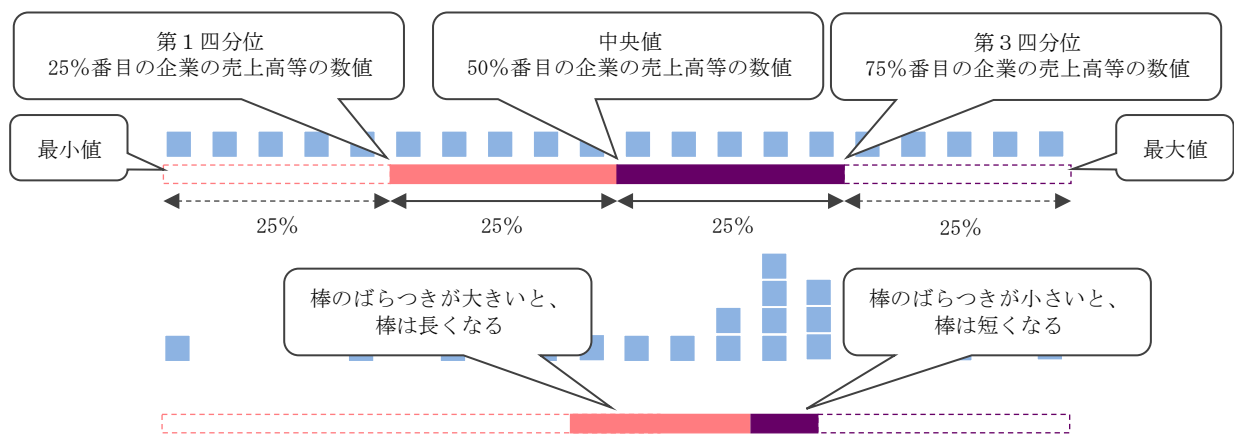
(注) 集計表第10-1表、第10-7表参照。

○次ページからのグラフ（参考図1～参考図3）の見方

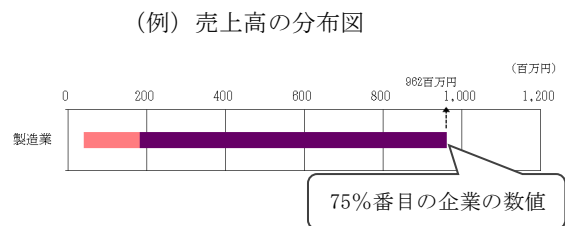
次ページ以降のグラフでは、産業大分類別の中小企業（法人企業）の売上高及び経常利益（以下「売上高等」）について、パーセンタイル（百分位数）を棒グラフで視覚的に表している。パーセンタイルとは、データを小さいものから順に並べたときに、ある値が下位から何番目（又は上位から何番目）に位置するかを百分位で示したものである。50パーセンタイルは、中央値とも呼ばれる。

中央値は、二つの棒の境界である。また、中央値から棒の両端までの間には、それぞれ各産業大分類の企業の25%が含まれる（つまり二つの棒を合わせると、各産業大分類の企業の50%が含まれる。）。

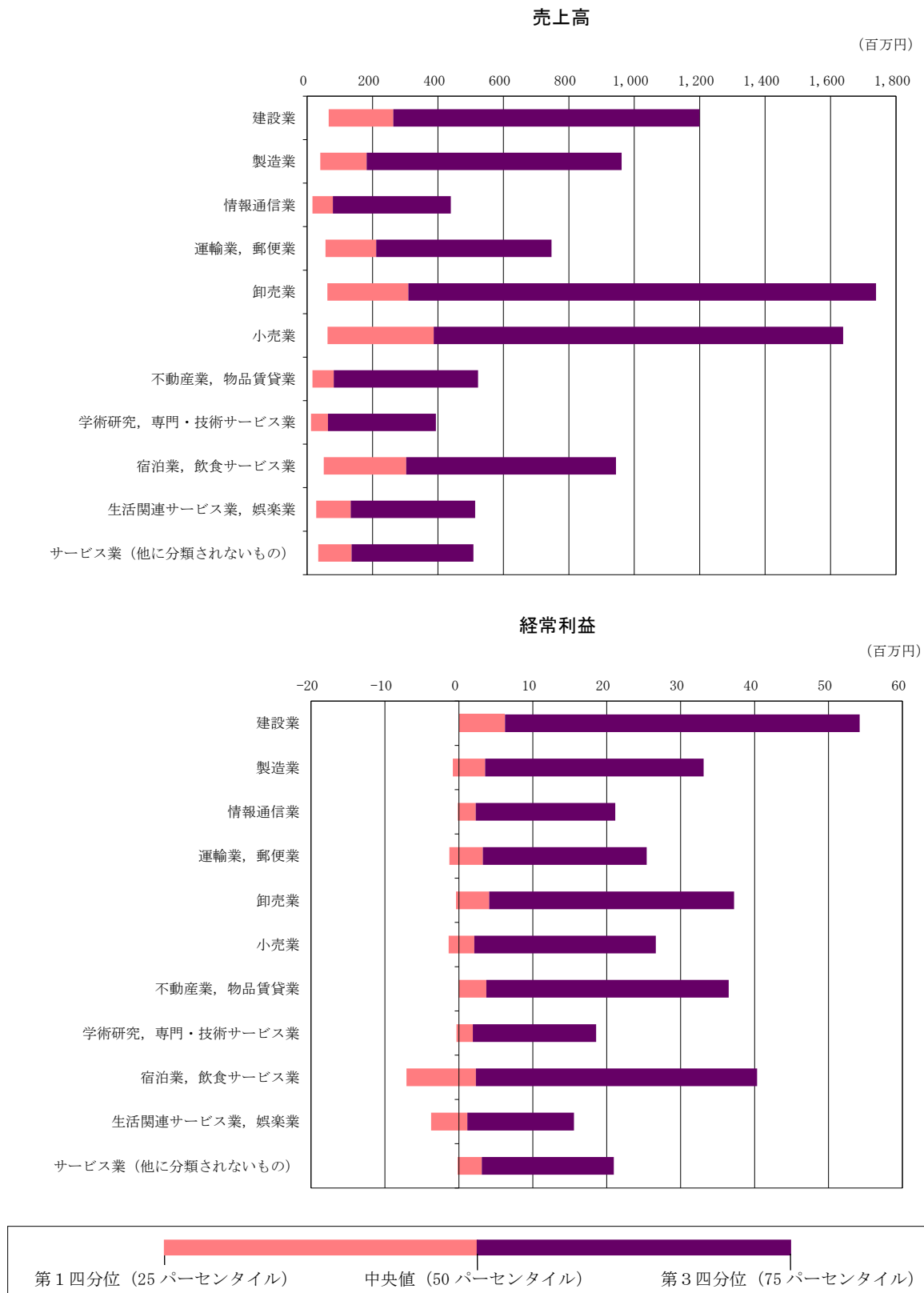
このような表し方をするすることで、産業大分類により大きく異なる売上高等の分布の差を視覚的に確認することができるとともに、具体的な売上高等の数値について、産業大分類内においてどの程度の位置となるのか把握することができる。



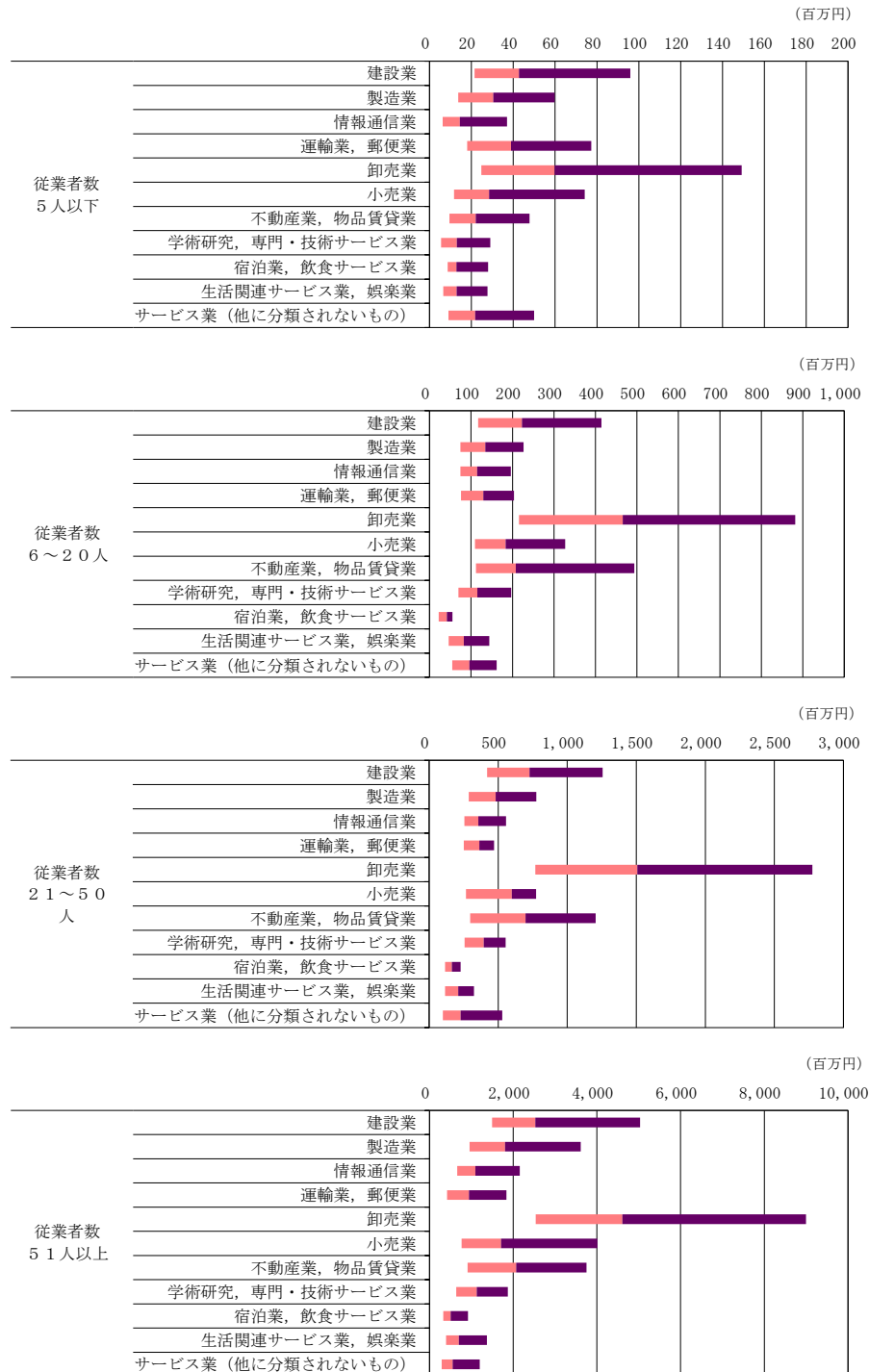
右図において棒グラフの右端は、当該産業大分類において下位から75%番目（上位から25%番目）の企業の売上高の数値（962百万円）を表している。



参考図 1 売上高及び経常利益の分布図（産業大分類別）



参考図2 売上高の分布図（従業者規模別・産業大分類別）



第1四分位 (25パーセンタイル)

中央値 (50パーセンタイル)

第3四分位 (75パーセンタイル)

参考図3 経常利益の分布図（従業者規模別・産業大分類別）

